



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「朱夏の女優黒木瞳のインド I」

いささか古い話で恐縮だが、わが輩の思い出話をしよう。後段では黒木瞳がわが輩の妻に違われた裏話を披露する。

さて読者諸氏よ。五木寛の小説『朱夏の女たち』を読まれたであろうか。おそらく、いないだろうと思うので簡単に紹介しておく。

三人の女性がインドに旅行するという物語である。内容については本を読んでいただくとして、次の本の帯から想像して頂きたい。

いま、女たちは青春から〈朱夏〉へ。

人生の最も輝かしい季節〈朱夏〉。

三人の女たちが、青春の季節から新たな時代にむかって旅立とうとする愛と自立への艶やかな反乱。

まず「朱夏」というコトバについて説明しておかねばならない。

せいしゅん
青春(木)

しゅか
朱夏(火)

はくしゅう
白秋(金)

げんとう
玄冬(水)

これは中国の五行説に基づいた思想である。あらゆる物は火・水・木・金・土の五種類の元素から成り立っているという。

われわれがよく使う“青春”は、これからきている。春夏秋冬の四季に色が対置される。青・朱・白・玄(黒)の四色である。四季に四色を当てはめると「人生の時期」を表すことになる。

表題は中国の用語なのに、小説の舞台はインドである。

ところでインドにも同じような人生の時期がある。次の四つである。

学生期：師について真面目に勉強する。

家住期：子孫をつくり家庭を守る。

林住期：義務を終えたら森に入り聖典などを学ぶ。

遊行期：インド中の聖地を巡り死んでいく。

これらを四住期と呼ぶ。

朱夏の女といえば、三十歳台の女性に当たるであろう。インドの四住期では家住期に相当する。インドが舞台なので「家住期の女たち」とすると、色艶がない。

そこで五木は考えた、と思う。表題を“朱夏”にすれば、艶やかさが浮き出てくると。

それを映画化するには、さらに艶やかさが必要となる。そこで三人の女優が選ばれた。

黒木瞳 (^{しょう}笙 ^{ななえ}七恵役)

かたせ梨乃 (^{いのうえ}井上 ^{じゅり}樹理役)

二宮さよ子 (^{はるな}榛名 ^{ともこ}朋子役)

二宮は妖艶な役柄を演じることができるベテラン女優である。かたせはテレビ番組「11PM」のカバーガールをしていたぐらいだから肉感的な魅力がある。さて、黒木に艶やかさがあるか？

(あると言えばあるし、ないと言えない)

わが輩は黒木瞳を知らなかった。そこで、ぼん子の助言にしたがってレンタル・ビデオ屋で『化身』を借りてきた。それで艶やかさを感じたか。

(答えはNOである)

前置きはこれぐらいにしておき、映画撮影の裏話に移ろう。

話は制作会社「仕事」からやってきた。インドで撮影したいのでコーディネイトをして欲しい、と東京オフィスに依頼があった。

まず、監督である高田宏治に会うために京都の旅館に向かった。高田は有名な脚本家として数々の作品を手がけていた。わが輩が知っているのは「極妻シリーズ」ぐらいである。

監督の自宅は京都にあるのに、なぜか旅館に泊まっていた。

(あとでその理由が判明したけど、内緒)

どうやら定宿らしい。なるほど映画人というものは、粋な宿に泊まるものだと感心した。

この作品は高田にとって初監督になる。つまり監督としては素人に近い。そこはよくしたもので、経験豊富な助監督アブさん(油谷誠至)がついていた。

プロデューサー、監督、助監督など数名とわが輩はロケハンに出かけた。本隊出発の一週間前である。このときわが輩は“ロケハン”の意味を初めて知った。即ちロケーション・ハンティング(撮影の下見)のことである。

(監督も素人、わが輩も映画撮影の経験なしで、一体どうなるの？ 不安だ！)

実は、もっと不安材料があった。

今回は、その不安の根源について語ろう。不安の根源は、インド的には“無明”から生ずる。哲学的・内的な不安である。わが不安材料は、わが輩のような一般人がどうのこうのできない外的要素の不安である。